

# 明治元訳聖書訳文考序

吉野政治

## はじめに

幕末から明治初期に行われた聖書の和訳に漢訳聖書が果たした役割の大きさは改めて言うまでもない。村岡典嗣氏は聖書の和訳は聖書漢訳史の「余流」と捉えられるとする（『日本思想史研究』岩波書店、昭和五年〔1930〕刊 p.480）。

現行日本訳聖書の歴史的由来に就いては、自らこの聖書漢訳史の余流たる観を為し、この意味で日本訳聖書の為に、特に源泉となり模範となつたものは、Delegates Version ではなく、Morrison 訳のたぐひでは固<sup>もと</sup>よりなく、実に Bridgman 及び Culbertson の訳であつた。

右に言う「現行日本訳聖書」とは文語訳のことであり、Morrison 訳とは『神天聖書』（『新遺詔書』一八三三年刊・『旧

遺詔書』一八三三年刊）、Delegates Version とは Morrison 訳を Medhurst が中心となつて改訂した『代表委員訳聖書』、Bridgman と Culbertson の訳とは『新旧約全書』（一八六四年刊。本稿では「B・C 訳」と言う）である。

海老沢有道氏もまた次のように言われている（『日本の聖書——聖書と訳の歴史——』（日本基督教団出版部、昭和三十九年〔1964〕刊 pp.87-88）。

日本における聖書に言及するにあたって、見逃すことのできないものは漢訳聖書である。それは和訳にあたって原典主義が採られたとは言え、漢訳が参考にされたばかりか、聖書の各書名において、キリスト教的術語において、それらを継承したものがきわめて多いからである。（中略）へボンが初めて和訳を志したのは漢訳からであり、その後、

S・R・ブラウンとの協力も、彼らが中国語の知識を持っていたからであり、それなしには、聖書の和訳が困難であつた事情なども、それを示す。全く漢訳聖書がなかつたならば、和訳はより困難であつたばかりでなく、文学的表現においても低からざるを得なかつたであらう。

ヘボン (J. C. Hepburn) が翻訳委員社中のメンバーの一員として公的な和訳聖書の翻訳に取り組む前に試みていた聖書と訳において漢訳聖書が大きな助けとなつていたことは、ヘボン自身の文久元年〔1861〕二月十四日付ミッション本部宛書簡<sup>(1)</sup>に次のように書かれていることから分かる(傍線は引用者。以下同じ)。

聖書を日本語に翻訳するということが、わたしどもの最も重要な事業であると、わたしどもすべてのものが感じております。ですから、日本語の知識を習得し、日本語の書物を読んで、その任務に適するよう努力している次第です。わたしどもの語学の進歩はおそいし、文法や字典や翻訳などに関し、人の助力を得ることもできず、やむを得ずわたしども自らやるほかありません。けれども非常に励まされ、前途洋々たるものがあります。わたしどもの日本語の教師

が少しの苦勞なく読み、そして理解し得る立派な漢文の聖書が手許にあるから、聖書翻訳事業の助けとなつております。ブラウン氏とわたしとは、マルコ伝を翻訳する上に大切な手引としてこの漢文の聖書を、日本語に訳し直すことによって、さらに多少の進歩をみたのです。

また、同年四月十七日付の書簡(北米長老ミッション本部主事ウォルター・ラウリー J. C. Lowrie 宛)にも次のように見える。

日本語での程度の仕事ができるか、ためすためにマルコ伝を日本語に翻訳することを始めました。この翻訳をやつてみて、中国における宣教師たちの訳したすばらしい漢訳聖書によって、非常な助けを受けたことを発見いたしました。実にこれは偉大なる助力でありました。それは日本語の聖書の基礎となつていゝのです。日本語の聖書は漢字に日本語の格や動詞の語尾をはさんで熟語を作つて文章をつづつたものであります。これを例証するため「四書」からとつた一つの文章に日本語を添えてみます。

シナ語

子曰学而時習之不亦説乎

日本語

子曰く学<sup>ん</sup>で而して時に之を習<sup>ふ</sup>、亦説<sup>またよごぢら</sup>バ不ん乎<sup>や</sup>

シナ語

有朋自遠方来不亦楽乎

日本語

朋<sup>あり</sup>有遠方<sup>より</sup>自來<sup>また</sup>る亦<sup>また</sup>楽<sup>よごぢら</sup>ま不ん乎<sup>や</sup>

教育のある日本人ならみな何の苦もなく漢文の聖書を読むことができず。ちよūd、われわれがラテン語を読むように訓点をつけて読むのです。ブラウン氏もこの仕事に従事しております。わたしどもの訳文を漢文の聖書と比較して、これを訂正するつもりです。

ヘボンやブラウン(S.R. Brown)などが私的試みとして行なつた部分的な和訳聖書については暫く措くとしても、日本の最初の公的な和訳聖書である翻訳委員社中の所謂「明治元訳」が「B・C訳」に多くを負っていることは、両者の文章を比較して見れば明らかである。したがって、森岡健二氏の『近代語の成立』(明治書院、昭和四十四年刊)第七章「新約聖書の和訳」、第八章「旧訳聖書の和訳」を始めとして、これまでの国語学的研究がその類似を手かりに「明治元訳」の

訳語や文章を研究してきたのは当然のことであつた。

しかし、その類似を重視するあまり、「明治元訳」は「忠実な漢訳聖書の書き下し文」である、あるいは「<sup>(2)</sup>尽く支那訳に模倣して之を訳出せり」(後述する高橋五郎の言)と捉えてはならない。「明治元訳」の文章には確かに漢訳聖書の書き下しと見えるような部分が多いが、それがすべてではない。時代に先駆けて新しい文体を作り出しているものもあり、それらを正しく評価することは大切である。また、外国人翻訳者たちは原典主義を採り、英訳聖書なども参考にしていたのであり、それがどのように反映されているのかを明らかにすることも大切である。

## 1 新約聖書翻訳法

良く知られていることではあるが、明治十三年に聖書翻訳委員社中によつて最初の公的和訳聖書『新約全書』が刊行されるまでの経緯を改めて纏めておくことにする。

新教各派代表の宣教師十四名が横浜に会合し、新約聖書の翻訳を聖書会社の事業として行なうことが決議されたのは明治五年〔1872〕九月二十日のことであり、実際に着手されたのは明

治七年三月二十五日のことであつた。やがて分冊として刊行されてきた新約聖書所収の各書が纏められ、『新約全書』として刊行されることになる（この『新約全書』と後に完成する『旧約全書』を合わせたものを「明治元訳」また「委員会訳」と言ふ）。

新約聖書翻訳委員会の長はブラウンであつた。ブラウンは安政六年〔1829〕に來日した極初期の來日宣教師の一人であるが、その愛弟子である井深梶之助氏は、翻訳委員会の様子を次のように伝えている（一）統横浜回顧（二）聖書翻訳者としてのブラウン博士<sup>(3)</sup>、『福音新報』一四三五号、大正十一年〔1922〕十二月發行）。

新約聖書翻訳委員はブラウン氏の外にゼイ・シー・ヘボン、及びデー・シー・グリーン<sup>(4)</sup>の両氏であつたがブラウン氏は年長者であり、且委員長であつたと思ふ。日本人で此委員を補助したのは松山高吉、奥野昌綱、高橋吾良の三氏であつた。松山某、三輪某も関係したことがあるが、夫れは眞の暫時であつた。此の六人が日曜土曜を除く外は大抵毎日午前中ブラウン氏の書齋に会し、予め委員の一人が起草した所の翻訳文を批判決定したのである。その書齋とい

ふのは約十二畳敷位の間で、その真中に円テーブルがあり、その上には数種の原文新約聖書や註解書や漢訳の聖書やその他の参考書が列べられてあり、右の六人が此円テーブルを囲んで盛んに意見を戦わせた光景は今尚髣髴として目前にある様である。

井深は続けて和訳の原文について次のように記している。

ブラウン氏は委員長として且優秀なるギリシヤ語学者として新約聖書の翻訳には与つて最も功績のあつた恩人であると思ふが、同氏が聖書翻訳に就て最初から固く執つて一歩も譲らなかつた二つの主義があつた。即ち其の一は原文即ちギリシヤ文を和訳することであつた。

また、井深は「聖書和訳について」（『福音新報』第一〇八八号、大正五年〔1916〕五月四日發行<sup>(4)</sup>）でも次のように述べている。

さてブラウン先生から伝聞した所に依れば、翻訳委員が翻訳に着手する前に先決問題とも謂ふべき者が数ヶ条あつた。第一は何を正本として翻訳すべきかといふ問題であつた。是は頗る重大な問題ではあるが之に就ては大した議論もなくゼームス王勅定英訳（テツキスタス・レセプタス）の原

本に依ると定められたやうに承知する。乍然<sup>しかしなから</sup>当時知られた文の最古の原文を参酌した事は申す迄もない。

すなわち、和訳の正本にはゼームス王欽定訳 (The Authorized Version, King James Version) として知られている英訳聖書の原本となったギリシャ語原本が用いられたようである。後掲の松山高吉氏の「高橋氏の聖書翻訳の批評を読む」にも「翻訳の本とせしはグリーキ原書にして参観には英仏独支那等の訳書を用ゐたり。原書にて或は疑はしく或は説多くして一定なし難き所は普通の英訳に拠りて決するの定めなりき」ともあるが、実際は英訳に頼るところが大きかったものと推測されている<sup>(5)</sup>。いずれにせよ、外国人宣教師が原書や各訳書を参考にして訳した日本語は「不完全なる日本語」であり、それを日本人輔佐者達は斟酌し、漢訳聖書などを参考にして聖句として相応しい日本語文を作つていったようである。ただ、問題は日本人輔佐者にはギリシャ語を解する者はなく、英語に精通した者もいなかったことであつた。井深の右の文章は次のように続く。

それに付ても遺憾千万なのは当時日本人に原文に通じた者の無かつた事である。是は固より事情不得止事<sup>やむをえぬ</sup>ではあるが輔佐者達は諸種の支那訳と翻訳者達が不完全なる日本語を

以て原文を口訳する所を斟酌して日本文に直すより外に致方は無かつたのである。縦令原語に精通せずとも多少原語を解し且英語に精通した日本人が委員中に加はつて居たならば非常に便利であつたらうと思はれる。

さらに、その日本語文をどのような文体にするかについて、外国人宣教師と日本人補佐者との間で意見の対立があつたようである。井深の右の文章は次のように続く。

第二は文体の問題であつた。現今では時文といふ者も略形が定まつた様であるが、明治七八年頃は未だ時文といふべき形もなく、在来の片仮名交り或は漢文崩しか將た和文かの中を取る外なかつたのであるが、孰も一得一失でその選択に就ては翻訳委員は頗る苦心した痕跡が見える。  
(中略)

さて翻訳の文体に就ては堅い漢文風にしやうといふ説と、出来る文通俗的にしやうといふ説と二つに別れ、支那訳に信頼した輔佐役方には、自然と漢文風に流れんとする傾向があつた。ブラオン先生は始終その傾向と戦つたことを話されたやうに記憶する。折角聖書を日本語に翻訳しても只少数の学者丈に読めて普通の人民に読めぬやうでは何の益

があるかとは先生の屢々繰返した議論であつた。又輔佐方の或人が漢文ではコウダといふと漢文は本文に非ずと力説せられたことは恐らくは幾回であつたか分かるまい。

同氏の前掲「聖書翻訳者としてのブラオン博士」にも、先に引用した文章に続いて同様の回顧が記されているが、翻訳補助者の一人であつた松山高吉氏もまた、「聖書日本訳概言」で次のように述べられている。

偕その文体に就ては多少異論なきにあらず、随つて諸説も起り議論も生じたれど、幸ひに皆日本委員を信任せられたるより、我らの一言が重きをなし聽て鎮定して争論に花が咲き日を経るやうな事はなかりき。日本委員は固より漢文の文は好まず、雅文風の文も聖書には適はしからず、然ればとて西鶴や春水の如き俗文は野鄙に過ぐれば、其中庸を得、普通にして卑俗ならず、又莊嚴をも失はざらん文体をこそ作り成さめとの心構へなりき。(中略) 日本委員の抱懐する文体意見とグリーン博士の翻訳持論とが打つて一団となつて現れたるものが、第一回の日本訳新約全書なり。

この松山の文章は大正十五年に書かれたものであり、「第一

回の日本訳新約全書」とあるのは「明治元訳」のことである。この文体についての議論は「一種特別の日本語の翻訳」を生み出すことになつた。先に引用した井深の「聖書翻訳者としてのブラオン博士」の文章はさらに次のように続く。

それらの議論討論の結果、遂に聖書に於て我らの見る如き一種特別の日本語の翻訳が生まれた次第である。我等は今、日本訳新約書を読むと時々本字と傍仮名と調和せぬ様な所がある。是れは蓋しその時の反対意見の痕跡が文字の上に残つたものであらうが、委員会の決議では仮名が本文であつて漢字の方では無いと定まつたと承知して居る。夫れ故に新約聖書には振漢字はあるが振仮名は無いといふ様な事るのである。此一事を以て翻訳委員の苦心の程は察せらるる訳である。

この「一種特別の日本語」に対して翻訳補助者の一人である松山高吉氏は肯定的であることは、先に引用した「日本聖書訳概言」の続きに次のように見えることから窺える。

果たして然る乎、然らざる乎。当事者は黙して唯だ他の批評に任せんのみ。聖書翻訳成り世に公けにせらるゝや、非難の声も聞ゆる中に独り讚辞を之に与えし者あり、矢野文

雄（引用者注―龍溪）氏その人なりき。当時世に行はれたる明六雜誌（應徳義孝に發行せり）に連載されし大意に云く「翻訳せしもの数多しと雖も未だ嘗て此度翻訳成りし翻聖書書の如きものあるを見ず少しの翻訳臭き所なし実に翻訳の上乗なる者なり云々」と（注略）。矢野君の讀辭は當る乎、當らざる乎、そは知られざれど、同時に於ては珍しき文体にて雅ともつかず俗ともつかず、一種特異の文章と言はざる可らず。今日より視れば斯る特異の文章がおのづから日本時文の啓導となりたるも亦奇ならずや。

ところが、もう一人の翻訳補助者であつた高橋五郎氏は否定的である。彼は「基督教の聖書翻訳完成す」（『国民之友』第九号、明治二十一年四月六日發行）の中で次のように述べている。

此不文明の和語を以て今日の翻訳文に比ぶれば三歳の小児も亦其改良を大なるを認めん。然りと雖も今日の訳書決して完全なる者に非らず、今此に挙たる古訳は支那訳に本づいて作れる者なり、此事に於ては唯に五十歩百歩の差あるを見る而已。蓋し此新約書を訳するに當りて一種奇代なる事情の存するありて、（トビト）尽く支那訳に模倣して之を訳出せ

り。是此訳の諸人を悦服せしむる能はざる所なりとす。

文中に「今日の訳書」また「此新約書」とあるのは「明治元訳」（委員会訳）のことであるが、冒頭の「不文明の和語」また「古訳」というのは、それ以前に翻訳された私的な和訳聖書のことである。高橋の挙げているベツテルハイム訳『路加伝福音書』（一八五八年刊）は次のとおりである。

ヨハンノ ツカイ シリゾイテ エソ| スナワヂ ヨハン  
カ コトラ ヤコシテ モロくニ イツテ イハク、

（第七章二十四節）

イハク カシテ ナニガシ カリテ フタリ アリ、ヒト  
リハ 五十金ヲカリ ヒトリハ 五金ヲカル ツクナフ  
ベキ コト ナシ コトぐコレヲ マスカラス。

（第七章四十一、二節）

あわせて、ゴープル訳『摩太福音書』（一八七一年刊）の訳も挙げておく。

そこで おほぜい を み イエスウ やまゑ のほりて  
すわり たまうた ときにおでしが かれに まいつた  
かつ イエスウ くちを ひらき これらに おしへり  
まうすには それ ころに まづしき ものは さいわ

いじや けだし てんの ごせいじ その ひとつのも  
の なり (第五章一—三節)

この高橋の文章に対して松山は「高橋氏の聖書翻訳の批評を  
読む」(『国民之友』第二十一号、明治二十一年〔1888〕五月四  
日発行)で次のように反駁している<sup>(10)</sup>。

今日の新約全書も亦支那訳に由て成れる者なりといはれし  
は跡方なきことなり。一種奇態なる事情と云ふ語に何か意  
を含めたる如く見ゆれども、余も当時その翻訳に従事せし  
一人なるが別に奇態なる事も秘かなる事情もありしにあら  
ず。唯いさ、か隔靴の感なき能はざりしは、翻訳者の中グ  
リーキ語に明かなれば和語に十分ならず、和語に達すれば  
原語(新約聖書の原書はグリーキ語なり)に詳しからず、  
日支の学に通ずれば英並に原語に暗き等のことなりき。然  
ども亦原語に通達し、兼ねて和語も略ほ解し得る宣教師も  
ありつれば、一人兼学とはゆかざれども互の長所以て相助  
け共議討論しつ、一語一句を鄭重に訳せしもの故に甚し  
き誤訳はあるべくもあらじと考らるゝなり。斯て翻訳の本  
とせしはグリーキ原書にして參觀には英仏独支那等の訳書  
を用ゐたり。原書にて或は疑はしく或は説多くして一定な

し、難き所は普通の英訳に拠りて決するの定めなりき。然  
ば英訳にも支那訳にも同じからぬ所おほし。然るに支那訳  
に由て成れるなどいふは誠にいはれなきことなり。但し新  
約全書翻訳には高橋氏も余と共に暫く従事せられしことあ  
れば略ほ此等のことはしらるゝ、咎なるに殊更に一種奇態な  
どの語をさえ加へて斯ることをいはるゝ、は何か他に意あり  
ての事ならん乎など疑はるゝ程なりど、決して然ることあ  
らじ。唯フト思ひ誤りて筆走りしなるべし。

同じく翻訳補助者であつた高橋と松山の見解がこのように分  
かれるのは、西洋語への関心が強かつた高橋と、幼少の頃から  
漢学と国学を学び、和歌を詠み、「最初より英語を嫌ひて之を  
学ばざりし」松山とは、おのずから文体についての好みに異な  
るものがあつたからであらうか。もう一人の翻訳補助者である  
奥野昌綱氏は、この文体に関して書かれたものは管見に入らな  
いが、松山と同じく国学を学び、黒川真頼の下で国史国文を研  
鑽した経歴を持つ人物であり、松山と同じ考えではなかつたか  
と推測される(二人は明治二十三年〔1890〕刊『新撰讚美歌』  
の編者でもあつた)、奥野の『雅各書註釈』(明治十六年  
〔1883〕刊)の訳文は「明治元訳」を用いてゐる。



## 2 新約聖書の翻訳文の具体例

「明治元訳」と漢訳聖書の語彙がどの程度一致するののかについては、御法川恵子氏の「聖書和訳とその訳語についての国語学的研究」（東京女子大学『日本文学』二十五号一九六五）によつておおよそ知ることが出来る。御法川氏が「明治元訳」（委員会訳）のヨハネによる福音書から抜き出した一、二二三語について漢訳と対比した結果は次のようである。

- 第一類、漢訳聖書の訳語をそのまま音訳で使用しているもの  
 の …………… 六・二%
- 第二類、漢訳聖書の訳語を訓読して使用しているもの  
 …………… 三七・七%
- 第三類、その他  
 a 漢訳聖書の訳語を意識しているもの  
 …………… 三三・八%

b 漢訳と異なるもの  
 …………… 二二・三%

「明治元訳」の語彙が漢訳聖書のそれと極めて深い関係にあることがこの調査からも分かるが、本稿で注目したいのは第三類のbに属する語であり、それもまた軽視できないほどに多い

ことである。そのような種類のものは語彙だけではなく、句や文についても多く見られる。その例をいくつか例示する。

ヨハネによる福音書第一章一節から十五節は次のとおりである（「明治元訳」は明治十三年〔1880〕米国聖書会社刊の本文に句読点を付し、漢訳は一八六四年江蘇滬邑美華書館活字版〔すなわち「B・C訳」〕に返り点・句読点を付す）。

- 一【漢訳】 元始有<sup>レ</sup>道。道偕<sup>レ</sup>神。道則<sup>レ</sup>神。  
 【元訳】 太初<sup>ハ</sup>に道あり。道は神と偕に在<sup>キ</sup>。道は即ち神なり。
- 二【漢訳】 是道之始偕<sup>レ</sup>神也。  
 【元訳】 この道は太初に神と偕に在<sup>キ</sup>。
- 三【漢訳】 万物為<sup>レ</sup>道造。凡受造者無<sup>レ</sup>不由<sup>レ</sup>而造<sup>レ</sup>焉。  
 【元訳】 万物これに由て造らる。造れたる者に一として之に由らで造られしは無<sup>シ</sup>。
- 四【漢訳】 在<sup>レ</sup>道有<sup>レ</sup>生也者。乃人之光。  
 【元訳】 之に生あり。此生は人の光なり。
- 五【漢訳】 光照<sup>ニ</sup>於暗<sup>ニ</sup>而暗弗<sup>レ</sup>語<sup>レ</sup>之。  
 【元訳】 光は暗に照り、暗は之を曉らざりき。
- 六【漢訳】 有三神所<sup>レ</sup>遣之人一名<sup>ニ</sup>約翰<sup>一</sup>。

【元訳】 偕ここに神の遣し給へるヨハネと云る者あり。

七【漢訳】 彼來作證。即為レ光作レ證、俾三衆可三因レ之而

信一。

【元訳】 その來りしは證の為なり。即ち光に就て證を作、すべての人をして己に因て信ぜしめんが為なり。

八【漢訳】 彼非三此光一、惟為レ光作レ證耳。

【元訳】 彼は光に非ず、光に就て證を作ん為に來れり。

九【漢訳】 斯乃臨レ世之真光照三万人一者也。

【元訳】 夫すべての人を照す真の光は世に來れり。

十【漢訳】 彼嘗在レ世、世為三其所レ造而不レ識レ之。

【元訳】 かれ世にあり、世は彼に造れたるに世これを識らず。

十一【漢訳】 彼至三属レ己者二而属レ己者不レ受レ之。

【元訳】 かれ己の國に來しに其民これを接ざりき。

十二【漢訳】 凡受レ之者即凡信三其名二者彼賜三之權一為三神之

子一。

【元訳】 彼を接その名を信ぜし者には權を賜ひて此を

神の子と為り。

十三【漢訳】 此衆非レ由三血氣二非レ由三情慾一非レ由三人意一而生

乃由レ神也。

【元訳】 斯る人は血脈に由に非ず。情慾に由に非ず。人の意に由に非ず。唯神に由て生れし也。

十四【漢訳】 夫道成三肉身二居三我儕之間一。我儕見三其榮一猶三

天父独生之子之榮一以三恩寵二以三真理一充滿矣。

【元訳】 それ道肉体と成て我儕の間に寄れり。我儕の榮を見に実父の生たまへる独子の榮にして恩寵と真理にて充り。

十五【漢訳】 約翰為レ之作レ證呼曰、我言下後レ我來而先レ我在

以三其本先二於我一者上即斯人也。

【元訳】 ヨハネ之が證を作て呼びひけるは、我さきに我に後れ來らん者は我より優れる者なり。蓋

我より先に在し者なれば也と言しは此人なり。

第三節の【元訳】の「これに由て」は【漢訳】の「為レ道」

からではなく、英訳（ゼームス王欽定訳による）の by him に  
よるものであろう。第四節は英訳の In him was life, and the life  
was the light of men. によるものと思われる。第六節の「光に

就て」また「すべての人」も英訳の of the light また all men により、第十一節の「己おのれ」も his owne、第十三節の「血脈ちま」も blood、第十四節の「肉体にくたい」も flesh の訳と考えられる。さらに第十五節の「さきに我われに後おく来きたらん者ものは我われより優まされる者ものなり」は This was he of whom I spake. He that cometh after me, is preferred before me, for he was before me に「なるものと思おもわれる。

実は右の英訳との関係は既に森岡氏が指摘されているものである（『近代語の成立』語彙編 pp.193-6）。森岡氏はこれらを指摘された上で、「漢訳と和訳との間に多少の異同があるが、しかし、それも、わずかの違いであつて、大局的には、非常に高い精度で両者が対応していることがうかがえる」また「以上によつて、和訳聖書が漢訳聖書にその書き下し文的性格をもつて、いることがあきらかになつた」（傍点引用者）と言われている。「大局的には」そのように考えることに異論はないが、御法川氏の語彙についての調査における第三類 b に相当するものが相当数存在することは無視できない。

マタイによる福音書の第六章九節から十三節は次のとおりである。

九【漢訳】 故爾祈禱当三如レ是云二、我父在レ天。願爾名聖。

【元訳】 然されば爾なんぢら昔いひかく祈いのるべし。天てんに在ます我われ儕らの父ちちよ、願ねがはくは爾なんぢら名なを尊あが崇めさせ給たまへ。

十【漢訳】 爾国臨格。爾旨得レ成在レ地如レ在レ天焉。

【元訳】 爾なんぢら国くにを臨まらせ給たまへ。爾なんぢら旨こころの天あまに成なるごとく地ちにも成なせ給たまへ。

十一【漢訳】 我儕所需之糧今日賜レ我。

【元訳】 我われ儕らの日用にちようの糧けふを今日けふも与あたたまへ。

十二【漢訳】 免二我儕諸負一如三我免一負レ我者。

【元訳】 我われ儕らに罪つみを犯かす者ものを我われゆるす如ごとく我われ儕らの罪つみをも免ゆるたまへ。

十三【漢訳】 尤母レ導二我於誘惑一。乃拯レ我出二於惡一。蓋国

也權也榮也皆歸二於爾一。爰及レ世世一。亞孟。

【元訳】 我われ儕らを試し探みに遇あはず惡あくより抜すけ出し給たまへ。国くにと權ちからと榮まかは爾なんぢらの窮むじろなく有あたまふ所ところなり。アーメン。

ここにおいても【漢訳】に多くを依存していることは明瞭であるが、十一節の「日用の糧」は【漢訳】の「所ところ需必要之糧」からではなく、英訳の Give us this day our daily bread. を参考に

したものと思われ、十三節の「窮なく」も【漢訳】の「爰及三世」ではなく、英訳の And lead us not into temptation, but deliver us from evil: For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever. Amen. からきたものである。この部分は祈祷の言葉であり、敬語が加えられるなど他の部分より、日本語らしいものになっていることは言うまでもない。

ルカによる福音書第二章十四節に見えるキリスト降誕の時、天の使達が歌った頌栄の【元訳】は

天上いんかみところには榮光えいこう神かみにあれば地ちには平安おだか人ひとには恩澤めぐみあれ。

であるが、これは【漢訳】の、

在レ上則榮レ歸二於神一、在レ地則和平、人沐二恩沢一矣。

だけではなく、英訳の、

Glory to God in the highest, and on earth peace, good will

towards men.

も照らし合わされていると考えられる。

以上、新約聖書の訳文について見てきたが、原典の内容を正確で「莊嚴さを失わない」文体にしようとするれば、「在来の片仮名交り或は漢文崩しか將た和文」しかなかった時代において

は、勢い漢訳聖書の書き下しに似たものになることはやむを得ないことであつたらう。高橋が自ら関わつた訳文に否定的なのは、自らの思い描いた理想の文体に較べて、このような文章にしかなりえなかつたことに忸怩たる思いがあつたものと思われ。しかしなお、こうした訳文の中にも井深が「今日より視れば斯の特異の文章がおのづから今世時文の啓導となりたるも亦奇ならずや」と指摘している「今世時文」を改ひらき導くものが胚胎していたことに注目すべきである。当時唯一の宗教雑誌であつた東京青年会雑誌局刊『六合雜誌』（編集長は小崎弘道）第十七号（明治十五年〔1892〕一月発行）の「聖書ノ翻訳」と題された「評説」にも、

新約全書ノ翻訳ハ其委員諸氏ノ勤勉忍耐ニ由リテ已に成就シテ現ニ吾ガ国ノ人民ヲ利益化導スルノ功著シク彰ハレタリ。其性質ヲ言ヘバ固ヨリ創業ノ事ナレバ不完全ナル所歟カラネドモ概スルニ其体裁ハ殆ド当ヲ得タルモノト謂フ可シ。今ヤ吾国ノ文学ハ漢文ヲ用ヒントスルノ傾向アリテ新聞雜誌ヨリ学校ノ教科書ニ至ル迄漢文ヲ直訳シタルガ如キモノヲ以テ満足スル能ハザルコトハ識者ヲ待タズシテ知ル可キナリ。…(中略)…余輩ノ予想スル所ノ文学ノ改革ハ其

路ヲ和文改良ニ取ルナルベシ。已ニ其徴候ハ微カニ新聞紙上ニ現ハレタルガ如ク覺ユルナリ。近來歌及物語類ノ私底ニシテ価ノ騰貴セルモ亦一ハ此ニ原因スルナランカ。何ニセ將來日本ノ文学ハ此頃頻リニ流行セル漢文類似ノモノニ非ズシテ吾ガ邦古典ノ文学ニ範リ今日ノ時勢ニ照合シテ之ヲ改良用施スルナラント思ハル、ナリ。我儕和文新約全書ヲ見ルニ或ハ国学ニ僻シ或ハ俚俗ニ流ル、所モアリテ未ダ十分ナル地位ニ達セザラネドモ今ノ体裁ヲ維持シテ改良ニ改良ヲ加ヘナバ宜シカラン。是実ニ己レノ解スルヲ名文ト見做シ解セザルヲ不都合ト臆断スル外国人ガ不用意ノ功名ト謂フベシ。新約全書ノ翻訳ハ斯ノ如ク先々満足ヲ得タレドモ（下略）

とある。

### 3 旧約聖書の翻訳法

翻訳委員社中による旧約聖書の翻訳は新約に遅れて始まり、各書の分冊の刊行を経て、明治二十一年の『旧約全書』として結実する。『基督教新聞』明治二十一年二月号所載の「フルベツキ氏講演<sup>14</sup>」には次のようである。

日本にて聖書翻訳の事は千八百七十四年（明治五年）九月廿日横浜にて開きたる外国宣教師の会議に於て新約全書の翻訳委員を設置したることを以て嚆矢とす。然に右横浜聖書翻訳委員の未だ其業を卒へざるに先ち同七十六年（明治九年）十月卅日東京なる宣教師の中に於て集會を催ふし、東京聖書委員会なるものを置きて専ら旧約全書の翻訳に従事せしむることとなりしが（下略）、

すなわち、旧約の翻訳は明治九年に東京在任の宣教師が横浜の新約聖書翻訳委員の協力を得て始められた。明治十一年〔1878〕にはヘボンが委員長に、カクラン（G. Cochran）が書記に選ばれた。明治十五年には常置委員会が再改組され、ヘボン、フルベツキ（G. Verbeck）、グリーン（D. C. Greene）が翻訳委員兼訂正委員となった。邦人翻訳委員として関わったのは松山高吉、植村正久、井深樞之助である（井深は日ならず辞職している）

新約については周到な翻訳体制が整えられていたのに対して、旧約の場合には種々の理由から十分な体制はとられなかったようである。植村久正の「聖書の翻訳」（『六合雜誌』第十七号、明治十五年〔1882〕一月十六日發行<sup>15</sup>）に「新約全書ノ翻訳ハ内

外数名ノ学者紳士ガ日々会合校讐シテ漸クニ成レル者ナリ。然ルニ旧約書ハ委員等心々ニ之ヲ分任シテ翻訳スル由聞及ベリ」とあり、松山高吉「聖書翻訳と聖書会社との關係を述べて米國聖書会社の創設百年紀念会を祝ふ」(「護教」大正五年五月号)<sup>(16)</sup>にも、

新約全書は第一の翻訳、第二の改訳共に内外委員の厳正なる研鑽によりて成りたる者なれど、旧約全書は之に反し、其の大部分は個々区々に翻訳せられたるにて、修正改竄はせしものの彼の大部の書を僅々二個年余りの間に済せしのみならず而もその間に詩篇、イザヤ書、哀歌、雅歌等の數書を新たに翻訳して欠けたるを補ひ、辛うじて旧約全書を具備したるなれば、自然疎漏は免れず、誤謬の見落しも亦少なからざらん。翻訳に巧拙あり、文体に各様あれど、之を正して統一する時日を与へられざりしは、今も尚ほ遺憾とする所なり。然れば此度新約の改訳成るに就いても旧訳の改訳の必要を感じらるるなり。

とある(右の文中「第一の翻訳」というのは「明治元訳」のことであり、「第二の改訳」というのは「大正改訳」のことである)。

しかし、できあがつた訳文の文体はそれほど不統一なものとは成つてはいないようである。その理由を明治二十一年(1888)二月三日に行われた旧訳聖書翻訳完成祝賀会において、旧約聖書翻訳並びに出版の常任委員長としてヘボンが次のように述べている。<sup>(17)</sup>

翻譯委員を同時に訂正委員に任命せざるを得なかつたが、このことが文体の統一、全卷の一貫性という点で、實は大きな利益をもたらした。旧訳聖書と新約聖書の文体を調和させることに努め、現に一人の人間の仕事であるかのよう

に完全な統一がとれているのもこのためである。  
旧約聖書もまた原典に忠実に訳されたと言う。ヘボンは同じ挨拶で「この翻訳に當つては、ヘブルの原語に可能なかぎり忠実であると同時に、神の御心が伝わるように、これを表現する美しく莊嚴な言葉を選ぶように努力した」と述べており、明治十七年(1884)十二月二十六日付ヘボンのラウリー博士宛ヘボン書簡にも次のようにある。

わたしどもの翻訳はヘブル語から訳したのです。わたし自身はヘブル語に精通してはいませんが、しかしその言語を味読するくらいは知っており、理解しています。難解な個

所にぶつかった場合には、種々、多くの手引きがあります。たとえばギリシヤ語の旧約聖書、ラテン語の聖書とか、フランス語の聖書その他、幾冊かの原文批評注解書を参照いたします。

新約の場合に取られた「原書にて或は疑はしく或は説多しき」ということも、ヘボンの右の言葉には触れられていないが、同じであつたものと思われる。そしてまた実質的には英訳聖書が用いられていたことは、井深梶之助氏の談に「旧訳聖書の翻訳は、植村先生は詩篇とイザヤ書、何れも松山氏フルベッキ氏と共同であつた。私はエゼキエル書を訳したが、それは信頼すべき英訳から重訳したのです」(「植村久正と其の時代」第四卷 p.183)と見え、和訳文中に加えられている語注が原著また漢訳には無く、英訳聖書の注に見られることから推測されることである。<sup>(18)</sup> さらにまた、日本人の輔佐者達は原文は理解できず、「諸種の支那訳と翻訳者達が不完全なる日本語を以て原文を口訳する所を斟酌して日本文に直すより外に致方は無かつた」とも新約の場合と同じであつたろう。

#### 4 旧約聖書の翻訳文の具体例

こうして出来上がつていった日本語文が漢訳聖書の書き下し文に似ており、しかしまた全くの漢訳聖書の書き下しではないことも新約の場合と同じである。例えば『創世記』の冒頭部分の訳は次のとおりである(「漢訳」は一八六三年江蘇滬邑美華書館活字板に返り点・句読点を付し、「和訳」は明治十七年に米國聖書会社から分冊で刊行されたものに句読点を付す)。

一 【漢訳】 元始時、神創<sup>二</sup>造天地。

【和訳】 元始に、神、天と地を創造たまへり。

二 【漢訳】 地乃虚曠、淵面晦冥、神之靈覆<sup>二</sup>育於水面。

【和訳】 地は定形なく虚曠くして黒暗淵の面にあり。

神の靈、水の面を覆たりき。三 【漢訳】 神

曰、宜有光、即有光焉。

【和訳】 神、明りあれと言たまひければ光ありき。

四 【漢訳】 神觀<sup>レ</sup>光為<sup>レ</sup>善、神遂分<sup>二</sup>光暗。

【和訳】 神、光を善と観たまへり。神、光と暗を分ち

たまへり。

五 【漢訳】 神名<sup>二</sup>光者<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>昼、暗者曰<sup>レ</sup>夜。有<sup>レ</sup>夕有<sup>レ</sup>朝、

是乃元日。

【和訳】神、光を昼と名け、暗を夜と名けたまへり。

夕あり朝ありき。是首の日なり。

特に第一節は漢訳の書き下しと言われても仕方ないが、敬語が加わっていることは注目される（分冊で刊行された明治十年刊『旧約聖書 創世記第一二三章』、また第十一章までの明治十三年刊『旧約聖書創世記』には敬語は加わっていない）。以下の節はより自然な日本語になるように文章を整えられている。漢訳からではなくヘブライ語原書または英訳から来たと考えられる語句も見える。例えば第二節の「定形なく」は漢訳にはなく「虚」<sup>(19)</sup>「曠」ともに「むなし」の意、ヘブライ語原書の、

ヴェハアレツ（そして地は）ハイター（〜であった）ト  
 フー（形なく）ヴァヴォフ（虚しい）ヴェホシェフ（そして闇が）ア（の上に）ペネー（面）テホム（深淵の）  
 ヴェルアは（また霊が）エロヒーム（神の）メラヘフエト  
 （飛び回っていた）ア（の上に）ペネー（面）ハマイル  
 （水の）

あるいは英訳の、

And the earth was without forme, and voyd, and darkness

was upon the face of the deepe : and the Spirit of God  
 moued upon the face of the waters.  
 によるものと思われる。

旧約の訳文にはその後の明治文学に大きな影響を与えた名詞があることは知られている。木村毅「明治大正文学夜話」（『解釈と鑑賞』昭和四十年五月号）「日本訳聖書（上）——明治文学史に無視された領域——（第五回）」に指摘しているとおり、早く上田敏は新旧約和訳聖書の文章の素晴らしさを次のように讃えていた「細心精緻の学風」（『帝国文学』第二卷第八号、明治二十九年八月発行）。

和訳旧新約全書新教の派なる米國聖書会社版ひろく行はれて筆路頗る雅健なり。（中略）吾等は常に英文学の妙趣を喋々するひとにして伝道の書第十二章の幽婉壮美なる措辞雅歌第八章第六節の簡潔深沈なる辞令、または哥林多前書第十三章の清秀迫らざる論鋒の如きを称揚することなきを怪しむ。わが和訳の聖書中にも詩篇百三十編京まうでの歌第十三篇巴比倫の河のほとりの柳の歌第百三十三篇ダビテのよめる京まうでの歌、雅歌全部、以賽亜第三十四章第四



十章の如き全く国文の修養をおこたれる十数年前に於てよくもかゝる雅致の文をなし、かと驚歎せしむ。

また、

明治の大翻訳は疑もなく敬虔の信徒等が刻苦して大成せし旧新約全書なれども、爾来統出せる西洋文学の翻訳にして、能く原文の声調を味ひ辞章の措列を考へて、或時は流麗暢達又或時は簡勁粗宕、一々欧文の機微を穿ちて訳出したものは、殆ど稀なり。

ともある。豊川実氏（『日本英学史の研究（新訂版）』千城書房、昭和三十八年刊 p. 521）によれば、『詩篇』の訳には松山高吉が関わり、『以賽亜書』の訳には主に植村正久が関わっているようであるが、上田敏をして「国文の修養をおこたれる十数年前に於てよくもかゝる雅致の文をなし、かと驚歎」せしめた一つを紹介すれば、『詩篇』百三十編「京まうでの歌」の「明治元訳」は次のとおりである。

あ、エホバよ我ふかき淵より汝をよべり。主よ、ねがはくはわが声をき、汝のみ、をわが懇求のこゑにかたぶけたまへ。ヤハよ主よなんぢ若もろくの不義に目をとめ給はゞ、誰かよく立つことをえんや。されどなんぢに赦あ

れば、人におそれかしこまれ給ふべし。われエホバを俟望む。わが靈魂はまちのぞむ。我はその聖言によりて望をいだく。わが靈魂は衛士があしたを待つにまさり、誠に衛士が且をまつにまさりて主をまてり。イスラエルよエホバによりて望をいだけ、そはエホバに憐憫あり、またゆたかなる救贖あり。エホバはイスラエルをそのもろくの邪曲よりあがなひたまはん。

この訳に対する漢訳は次のとおりである。

耶和華歟、我自深淵籲爾兮。主歟、願爾聽我之声、以爾耳聆我懇求之声兮。耶和華歟、若爾鑒察愆尤、主歟、則誰能立兮。然爾施赦宥、致人畏爾兮。我俟耶和華、我靈俟之、而企望其言兮。我靈俟主、甚於待且者之待且、待且者之待且兮。以色列歟、爾宜企望耶和華、蓋耶和華施矜恤、抑且施贖救、甚多兮。彼贖以色列脫於諸愆尤兮。

また、本稿の筆者が任意に『エレミヤ哀歌』の冒頭を紹介すれば、

あ、哀しいかな。古昔は人のみちみちたりし此都邑いまは凄しき様にて坐し、寡婦のごとくになれり。嗟もろくの

民の中にて大なりし者もろくの州の中に女王たりし者、いまはかへつて貢をいゝものとなりぬ。彼よもすがら痛く泣きかなしみて涙面になる、その恋人の中にはこれを慰むる者ひとりだに無しく、その朋はこれに背きてその仇となれり。

の漢訳は次のとおりである。

維昔<sup>レ</sup>郇<sup>レ</sup>邑、居民衆多、今則<sup>レ</sup>不可<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>寂寞<sup>ニ</sup>兮、昔為<sup>ニ</sup>大國<sup>ニ</sup>、今若<sup>ニ</sup>嫠婦<sup>ニ</sup>兮、昔也列邦為<sup>レ</sup>彼所<sup>レ</sup>制、今則為<sup>ニ</sup>人供役<sup>ニ</sup>、能勿<sup>レ</sup>悲兮。彼終夕流涕、沾濡盈<sup>レ</sup>睫兮、良朋雖<sup>レ</sup>多、慰藉無<sup>レ</sup>人兮、我以<sup>レ</sup>彼為<sup>ニ</sup>良朋<sup>ニ</sup>、彼以<sup>レ</sup>我為<sup>ニ</sup>仇敵<sup>ニ</sup>兮。これらが単なる漢訳聖書の読み下しだと言ふことは誰にも言うことはできないであろう。上田敏の「卓見」を紹介した木村毅氏の文章は次のように始まっている。

明治翻訳文学の輝かしい大業績としてあげねばならぬものは、何をおいても日本語聖書の完成を以て第一とする。幕末民初から企画、着手、続行せられて、「小説神髓」が新旧文学の分水嶺を画する以前に、あのわが国空前絶後の文体の紛乱期に出現しながら、高雅優美崇厳にして、その本にふさわしき一種の新文体をつくり、後来の明治文学に至

大の影響を与え得たのは、驚歎ともまた奇蹟とも言い得る。しかるに今、座右にある明治文学史や文学辞典の類をひもといてみても、一つとしてこれを挙げたものがない。怠慢不注意あるいは無知でなくして、何であろう。

この木村毅氏の文章が書かれたのは今から約五十年前の昭和四十年であり、明治の新旧約全書が刊行されて約八十年後のことであるが、このような名訳も「明治元訳」には存在することを知らない者だけでなく、一見漢訳の読み下しと見えるものも、和訳と漢訳の読み下し文との間にある二、三步の距りが後の文章に來した影響を理解できない者には、今もなお同様の批判を受けるものと思われる。

## 5 ヘボンの漢訳聖書に対する評価の変化

ヘボンが私的に聖書の翻訳を始めた頃には漢訳聖書に頼つていたことは先に見たとおりである。しかし、ヘボンが翻訳社中の長として公的に聖書の和訳に取り組んだときの漢訳聖書に対する評価は異なっている。明治十七年(1884)十二月二十六日付ヘボンのラウリー博士宛ヘボン書簡に、

旧約聖書の翻訳に関して、わたしは過去三カ年にわたり、

ほとんど全力をつくしましたが、その仕事は予想どおりにはいきませんが、少しずつはかどっていますので、非常に嬉しく存じます。全く二十五年以上もたった今日、なお日本語の新旧約全書がこの国民に与えられていないということは、この国における宣教師全体が非難されてもしかたがありません。むしろ多くの障害もあり、教育ある日本人が漢文の聖書でおぎなつていたりしたため、こんなにおくれたのですが、しかしこれも考えようによっては、早く翻訳するよりも、はるかにすぐれた翻訳を完成するのに役立つのでしょう。また日本人の助手はキリスト信徒で、英学と漢学との素養もあり、仕事に熱心な人でありましたし、そういう人を得ることができたということは大きい利益もあつたのです。英語の聖書をよみ、充分にこれを理解する能力があるということは聖書翻訳にあつてすばらしい助けであります。(中略) 英語の聖書は立派なものですから日本人の助手が、一かどの英学者でさえあれば、わたしどもの仕事に非常な助けとなります。中国訳はここに三種類もあつて大いに役立つておりますが、あまりそれに頼れません。

おそらく旧約聖書翻訳委員の長として、厳密に聖書和訳の作業に取り組んだヘボン、漢訳と原典との間にある違いなどに気づいたのである。しかしまた、一方でヘボンは原典の内容が正しく踏まえられているものであれば、日本人の作り出す文体についてはそれほど問わなかったようである。同書翰に、

中国でもインドでもその他の国においても同様、日本においても、その国語、その特徴慣用句、思考の形式等に熟達して、日本人の学者や助手の手を煩わさない外国人はまあ一人もいません。翻訳が正しく、慣用語も用い、国民に喜ばれるようなものは、やはり日本人の助手を使って日本語の表現を用い、美しい文章にしなければなりません。従つて外国人と日本人とが互いに協同してやるべきことです。もし日本人がヘブル語やギリシヤ語を理解していたなら、外国人の手を煩わす必要はありません。しかし、もし日本人にそれができなければ、外国人ができるかぎり最善の翻訳をし、それに原語の意味の説明を充分してから、日本人の助手に渡すべきであります。日本人の助手はもとの訳文を訂正し、満足のいくものでしたら、それを稿了としてよいのです。

と見える。おそらくヘボン<sup>(1)</sup>は彼の日本語教師であり、和漢の学に通じていた奥野昌綱<sup>(2)</sup>らを通して日本人の文章に対する美意識を他の宣教師たちより理解していたものと思われる。

### おわりに

聖典の翻訳は原典から訳されることが正道である。「大正改訳」がギリシヤ語原典から日本人の手によって訳されたように、「明治元訳」も外国人宣教師たちは原典主義を採ったが、漢訳に頼らざるをえなかった日本人補助者も「(正本は)大した議論もなくゼームス王勅定英訳(テックスタス・レセプタス)の原本に依ると定められたやうに承知する」(井深「聖書和訳について」)とあったように、それが本来の形だと思っていたはずである。したがって、「はじめに」で引用した村岡典嗣氏の文章の続きに「更に委しく、日本訳聖書が漢訳の直訳以外にいで、いかなる程度に苦心し、また發揮する所があつたかについては、別個の問題として研究せられねばならない」とあるが、「明治元訳」の文章については、そのような点からの研究が今後は必要である。本稿では漢訳聖書に見あたらぬ語句について一部であるが触れた。今後は全文を通してそうした調査を試

みる必要があるであろう(「付記」参照)。

### 〔注〕

(1) ヘボンの書簡は高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店、昭和三十四年 [1959] 刊)の訳による。

(2) 森岡健二氏の「聖書の翻訳と現代語の表現」(日本聖書協会発行『聖書翻訳研究』no.8 昭和四十九年 [1974] 三月発行 3)に次のような説明が見える。

かな書きか、漢文くずしかの論争は、表面的には委員が主張を通し、補佐者が意見をひっ込めたように見える。(中略) 明治12年に翻訳が完成した時の聖書、すなわち初版の聖書は、大体においてかな書きの文章と言つてもいいような形で出版された。文章は流麗な和文脈で、しかも、かな書きであり、3人の外人委員の主張がここに見事に生かされたかのごとくである。ところが、不思議なことに、この仮名書きの聖書はほぼ初版だけで、明治13年以降に出た再版以下の聖書は、ほとんど黒々とした漢字かな交じり文に姿を一変してしまつたのである。なぜ、こんなことになつたか。実は、補佐者たちの書いた美しい和文脈の文章は、非常に忠実な漢訳聖書の書き下し文であつたからである。つまり、和文脈を取り入れたとは

いえ、忠実な漢文書き下し文なので、かなの部分に漢訳聖書の漢字を埋めることは実に容易なことだったのである。

- (3) 佐波亘編『植村久正と其の時代』(教文館、昭和十三年 [1938] 刊) 第四卷 p.137 から引用。
- (4) 山本秀煌編『日本基督教会史』(日本基督教会事務所、昭和四年 [1929] 刊) p.145 から引用。
- (5) 永嶋大典「聖書邦訳史略述」(ゆまに書房、一九九九年刊『幕末邦訳聖書集成 別冊』所収)に『「新約聖書」が依拠したテキスト(底本)は、一六三三年にライデン(オランダ)の書肆エルゼヴル(Elzevir)が出版したエラムス(Erasmus)校定のいわゆる「容認テキスト」(Textus Receptus, The Received Text)とごつごつになつてゐるが、実質的にはむしろ(欽定訳)(A V)が土台となつてゐる」とあり、『日本聖書協会一〇〇年史』(日本聖書協会、一九七五年刊)にも「訳業にあつたて、委員たちはジェームス王勅定英訳を底本とした」(p.48)とある。
- (6) 溝口靖夫編著『松山高吉』(松山高吉記念刊行会、昭和四十四年 [1969] 刊)による。表題の下に「大正十五年十二月米国聖書協会東京支店長アフレル氏ノ依頼ニヨリ筆ヲ執ル」と説明がある。
- (7) 豊田実『日本英学史の研究』(新訂版、千城書房昭和三十八年 [1963] 刊、p.511)に「けだし松山氏の言によれば、和訳新約の文体は同氏および奥野氏の主張にへボン博士が賛成されて決まつたとのことである」とある。
- (8) 「時々本字と傍仮名と調和せぬ様な所」また「仮名が本文であつて漢字の方では無い」というのは、例えば明治十三年刊『新約全書』「馬太伝福音書」の「却説」「降生」「聘定」「懷孕」「発露」のようなものを言い、「振漢字はあるが振仮名は無い」とある。「振漢字」とは、明治十一年刊『新約またいでん』に「アブラハムのすゑなるダビテのすゑ イエス キリスト のけいず」のようなものを言う。
- (9) 佐波亘編『植村久正と其の時代』第四卷 p.138 から引用。同右 pp.135-6 から引用。
- (10) 高橋五郎は昭和十年九月七日に没したが、読売新聞掲載の木村毅の「高橋五郎氏を悼む」に「明治十一年改訳委員会が出来た時、既訳のものを調べたのに、いづれもなつてゐなかつたが、高橋先生の前には、誤訳が最も少く、そして名文だったので、最小限の修正でそのまま採用せられた位だ」とあり「植村久正と其の時代」第四卷 p.139 から引用、また、小崎弘道「博覧強記の人・高橋五郎氏の死」に「植村、井深氏等の諸氏と共にプラオン博士の許にて英語を学ばれたが、至つて博覧強記であり、和漢の学は勿論弘く仏典にも抜渉せられ、語学はラテン、ギリシヤの古語は勿論英、仏、独、以、

西の国語にも略通ぜられて居つた」とある(同p.163)。ともに用詞またそれに準ずる文であり、割引いて受け取らなければなるまいが、高橋が西洋語に強い関心を持っていたことは確かであろう。

- (12) 高橋五郎「松山高吉氏の弁駁に答ふ」(『国民之友』明治二十一年〔1888〕五月四日・第二十一号)、『植村久正と其の時代』第四卷p.136から引用。

- (13) 松山は米国聖書協会が明治十一〔1878〕年から刊行した訓点漢訳新約聖書の訓点者であると言われる(『日本聖書協会一〇〇年史』p.62)。

- (14) 『植村久正と其の時代』第四卷pp.116-9

- (15) 『同右』p.215から引用。

- (16) 溝口靖夫編著『松山高吉』から引用。

- (17) 『植村久正と其の時代』第四卷p.124

- (18) 例えば「創世記」第十九章二十二節「其邑の名はゾアル(小

し)と称る」の「(小し)」は勅定英訳の注の「That is Little」に拠るものと思われる。

- (19) ミルトス・ヘブライ文化研究所編『ヘブライ語聖書対訳シリーズ』(株式会社ミルトス平成元年〔1990〕刊)の逐語訳を用いた。ヘブライ文字は印刷の関係から省略する。

- (20) 注(7)に同じ

【付記】

本稿は二〇一六年度の大学院の授業「日本語特殊研究」における成果のひとつである。この授業ではこれまで漢訳聖書との関係が重視されてきた我国初の公的和訳聖書の訳文に英訳聖書がどの程度関わっているかを『旧約聖書』「創世記」について具体的に明らかにする作業を行なった。「創世記」全文を通じた調査結果は山田朱音さんの提出したレポートに詳しい。